「国語科内容構成研究　漢字・漢文教材研究」授業実践報告

竹田　健二*

Kenji TAKEDA

Practical Report on “Study on Teaching Contents of Japanese (Researching teaching materials of Chinese Characters and Chinese Classics)”

１．授業の概要

言語教育専攻国語教育コースでは，従来国語科内容構成研究に属する授業科目として，５人の教科専門の教員が担当する，科目名に「教材研究」の語を含む５つの授業（いずれも単位数は２，開設時期は２年後期。必修２単位）を設け，毎年そのすべてを開講してきた。2017年度（平成29年度）入学生から実施されている現行のカリキュラムにおいては，従前からの「教材研究」の語を含む５つの授業に加えて，やはり教科専門の教員が担当するところの，科目名に「内容構成基礎研究」の語を含む５つの授業（単位数，２。開設時期，１年後期）を新たに設け，「内容構成基礎研究」必修２単位，「教材研究」必修２単位となった。漢文学担当の筆者は，2017年度は「漢文学内容構成基礎研究」を不開講として，「漢字・漢文教材研究」を開講した。「内容構成基礎研究」と「教材研究」とを，原則として交互に隔年開講とする方針がコース内で了承されたためである。本稿では，2017年度に開講した「漢字・漢文教材」の授業実践について報告する。

本授業のねらいは，中学校・高等学校において用いられている教材を取り上げ，それらに対して様々な角度から検討を加えることにより，目指すべき漢字・漢文教育のあり方を考察することである。そして，その達成目標は，①漢字・漢文とその教育とについて理解を深めることと，②漢字・漢文教育の教材開発の能力を高めることとである。

実は，「漢字・漢文教材研究」の創設当初は，専ら漢字指導にかかわる教材研究を中心とする授業として構想し，主に講義形式で授業を進めた。授業の中で特に重視したのは，「一般の社会生活において，現代の国語を書き表す場合の漢字使用の目安」（「前書き」１より）とされる「常用漢字表」である。

「常用漢字表」を重視したのは，学習指導要領の定めるところの小学校・中学校・高等学校の国語科における漢字教育は，基本的には「常用漢字表」に収められている漢字を読むこと，書くこと，そしてそれらを文や文章の中で使うことを目標としているのであるが，本授業の受講生となる学生の多くは，そもそも学校教育における漢字教育について，何がどのように学ばれているのかに関して，ほとんど理解が無いと予測されたためである。この予測は，後に本授業の実践の中で確かめられることとなった。

また，「常用漢字表」の附録である「（付）字体についての解説」が，具体的な字形の例を示しつつ，漢字の字体を理解する上で重要な点について要領よく解説していることも，「常用漢字表」を重視した理由である。

そうした「常用漢字表」を中心とする授業を数年継続したが，その後授業者は，教科書の漢文教材を中心とする演習形式の授業へと大きく改めることとした。この変更は，授業者が担当している漢文学関連の他の授業（「漢文学基礎講義」・「漢文学演習」）を実践する中で，少なからぬ受講生が高等学校在学中に所謂定番の漢文教材を学習していないことに気付いたためである。変更当初は，所謂定番の漢文教材の中から比較的短いものを選び，オムニバス的に取り上げてきたが，2017年度の「漢字・漢文教材研究」では，前述の「漢文学内容構成基礎研究」を2018年度から開講（国語教育主専攻１年生が後期に受講）することとなり，この「漢文学内容構成基礎研究」を比較的短い漢文教材を用いる授業にすることにしたことと連動して，教科書に掲載されている漢文教材の中でも比較的長いものを取り上げて，その全体を読み通すことにした。

なお，受講生が高等学校在学中に長い漢文教材を学習していないことについて，現時点では特に精密な調査を行っておらず，詳しい実態については不明であるが，おそらく授業時間数との関係から，多くの高等学校において長い漢文教材を取り上げることが敬遠されているものと推測される。しかし，例えば2017年度の本授業で取り上げた『史記』廉頗藺相如列伝は，「完璧」・「刎頸の交わり」などの故事成語の出典として，また刺客列伝の荊軻の話はドラマチックな名場面が連続する話として広く親しまれており，漢文教材として従来よく用いられてきた。このため，受講生が将来中学校や高等学校の国語科教員となることを想定した時，こうしたいわばよく知られている漢文に関連する知識や理解を欠くとなれば，問題となることが予測される。代表的な漢文教材に関する受講生の知識や理解の欠落を補い，加えて，比較的長い教材を通して読むことを通して，受講生がこれまでに学習し身につけた漢文に関する知識・技能等を確認し，そしてそれらを定着させ，更にその水準を向上させることを授業者は企図した。

授業の形態として演習形式を採用したのは，発表者と質問者との質疑応答を重視したためである。本授業に限ることではないが，受講生の主体的・主動的な学習を実現するための方策として，授業者は，受講生らの発言を

＊ 島根大学学術研究院教育学系

中心とする演習形式がより適切と判断している。また，受講生が将来授業者の立場に立った時のことを想定し，他者との質疑応答を臨機応変に行う能力を向上させるべく，実際に質疑応答を行う経験を積ませるために，演習形式を採用した。

２．授業の進め方

2017年度の「漢字・漢文教材」に用いる漢文教材は，各社の教科書に収録されている或る程度長さのある教材の中から選定し，最終的には大修館書店『古典２　改訂版』（平成20年２月文部科学省検定済，平成24年４月発行）の「漢文編　三　史記群像」を用いることとした。

「史記群像」は，「廉頗と藺相如」と「荊軻」との二つの教材に分かれており，「廉頗と藺相如」は更に「(一) 完璧帰趙（璧を完うして趙に帰る)」・「(二) 澠池之会（澠池の会)」・「(三) 刎頸之交（刎頸の交はり)」の三つの場面に，また「荊軻」は「(一) 風蕭蕭兮易水寒（風蕭蕭として易水寒し)」・「(二) 図窮而匕首見（図窮まりて匕首見る)」の二つの場面に分けられ，それぞれに見出しが付けられている。なお，「廉頗と藺相如」の末尾には「(史記，廉頗・藺相如列伝)」とあり，また「荊軻」の末尾には「(史記，刺客列伝)」とある。これは，出典がそれぞれ『史記』廉頗・藺相如列伝・刺客列伝であることを示すと考えられる。しかし，両教材は，『史記』廉頗藺相如列伝（『史記』巻八十一）の廉頗・藺相如に関する部分，及び刺客列伝（『史記』巻八十六）の荊軻に関する部分のすべてではなく，それぞれ一部が削除されている。削除された部分については，所謂リード文において現代語の説明に置き換えられていると見なすことのできるところもあるが，特に説明はなく，ただ削除されているというところも多い。

こうした現象は，おそらく国語科の古典の中の，或る程度分量のある教材については決して珍しくはないと思われる。しかし，教材化にあたって本文の一部削除が行われ，かつその削除された部分の内容についての特に解説も添えられていないとなると，そのことによって解釈に問題が生じる危険性があろう。すなわち，出典においては文脈に沿って理解することのできる事柄が，教材においては理解できなくなってしまう危険性が生じかねないのである。

また，学習者が教材をそのまま古典と理解してしまう危険性についても，配慮があってしかるべきであると筆者は考える。教材と出典との関係に関しては，そもそも教材とはどのようなものなのか，教材はどのようにして作られるのか，ということについて，少なくとも授業者となる者は理解し，必要に応じて学習者に助言する必要があろう。

こうした問題について考慮した結果，本授業では，選定した教科書教材に加えて，出典である『史記』の該当部分について，瀧川亀太郎『史記会注考証』の「廉頗藺相如列伝」・「刺客列伝」から廉頗・藺相如・荊軻の伝記の部分を抜き出した資料を受講生に配布し，教材と出典との比較を行わせることとした。

第１回の授業において，ガイダンスとして，選定したテキストと，該当部分の『史記会注考証』を配布して，授業のねらい及び各資料の解説を行った。次いで，次回以降の授業は演習形式で行うこと，つまり受講生が順次発表者として，各授業の冒頭で担当箇所についての発表を行い，次いで発表者以外の受講生全員が質問者となって質問を行うこと，この発表者と質問者との質疑応答の中から最も妥当と考えられる解釈を明らかにすることを本授業では目指す，ということを説明した。

その上で，各受講生の担当箇所の割り振りを行り，発表者となった者は発表に際して予め発表用資料を作成し，発表の前に全員に配布しなければならないこと，その資料には，（１）教科書教材の原文・（２）書き下し文・（３）現代語訳・（４）語釈・（５）出典と教科書教材との比較（両者の相違点・共通点）を必ず記載すること，その他に発表者が提示すべきと判断した地図等も適宜記載すること，発表の準備にあたっては，参考にすることのできる資料は何を用いても良いこと，参考にした文献については，必ず出典等を明記し，どこをどのように参考にしたのかが分かるようにすること等を指示した。

また発表者以外の出席者の全員が，質問者となることについて，質問を行う経験を重ねて質疑応答の能力を高めることがこの授業の目的の一つであると説明した上で，質問には自分で漢和辞書を調べれば簡単に答えを見つけることができるような，単純な，低い水準の質問もあれば，発表者の解釈について根拠を示してその誤りを指摘し，正しい解釈を提示するといった，かなり高度な水準の質問まで様々であること，もちろん最初から高度な水準の質問ができるわけではないが，質問を重ねる中でより水準の高い質問ができるようになるよう努力すべきであること，よりよい質問ができるようになるためには当然予習が必要であること，等を説明し，授業の中で積極的に質問・発言することを強く促した。

３．授業実践事例

紙幅の都合により，以下では「廉頗と藺相如」について述べる。行論の都合上，先ず『史記』廉頗藺相如列伝の廉頗・藺相如に関する部分を示す。□で囲われている部分は，教科書の教材において削除されている部分であり，それぞれの箇所にABCDを付して示す。また，①～⑧は，発表担当の範囲を示す。

A廉頗者、趙之良将也。趙恵文王十六年、廉頗為趙将伐斉、大破之、取陽晋、拝為上卿、以勇気聞於諸侯。藺相如者、趙人也、為趙宦者令繆賢舎人。①趙恵文王時，得楚和氏璧。秦昭王聞之，使人遺趙王書，願以十五城請易璧。趙王与大将軍廉頗諸大臣謀，欲予秦，秦城恐不可得，徒見欺。欲勿予，即患秦兵之来。計未定，求人可使報秦者，未得。宦者令繆賢曰，「臣舎人藺相如可使。」B王問、「何以知之。」対曰、「臣嘗有罪、窃計欲亡走燕、臣舎人相如止臣、曰、『君何以知燕王。』臣語曰、『臣嘗従大王与燕王会境上、燕王私握臣手、曰「願結友」。以此知之、故欲往。』相如謂臣曰、『夫趙彊而燕弱、而君幸於趙王、

故燕王欲結於君。今君乃亡趙走燕、燕畏趙、其勢必不敢留君、而束君帰趙矣。君不如肉袒伏斧質請罪、則幸得脱矣。』臣従其計、大王亦幸赦臣。臣窃以為其人勇士、有智謀、宜可使。」②於是王召見，問藺相如曰，「秦王以十五城請易寡人之璧，可予不。」相如曰，「秦彊而趙弱，不可不許。」王曰，「取吾璧，不予我城，奈何。」相如曰，「秦以城求璧而趙不許，曲在趙。趙予璧而秦不予趙城，曲在秦。均之二策，寧許以負秦曲。」王曰，「誰可使者。」相如曰，「王必無人，臣願奉璧往使。城入趙而璧留秦。城不入，臣請完璧帰趙。」③趙王於是遂遣相如奉璧西入秦。秦王坐章台見相如，相如奉璧奏秦王。秦王大喜，伝以示美人及左右，左右皆呼万歳。相如視秦王無意償趙城，乃前曰，「璧有瑕，請指示王。」王授璧，相如因持璧卻立，倚柱，怒髪上衝冠，謂秦王曰，「大王欲得璧，使人発書至趙王，趙王悉召群臣議，皆曰『秦貪，負其彊，以空言求璧，償城恐不可得』。議不欲予秦璧。臣以為布衣之交尚不相欺，況大国乎。且以一璧之故逆彊秦之驩，不可。於是趙王乃斉戒五日，使臣奉璧，拝送書於庭。何者。厳大国之威以修敬也。今臣至，大王見臣列観，礼節甚倨。得璧，伝之美人，以戯弄臣。臣観大王無意償趙王城邑，故臣復取璧。大王必欲急臣，臣頭今与璧俱碎於柱矣。」④相如持其璧睨柱，欲以撃柱。秦王恐其破璧，乃辞謝固請，召有司案図，指従此以往十五都予趙。相如度秦王特以詐詳為予趙城，実不可得，乃謂秦王曰，「和氏璧，天下所共伝宝也，趙王恐，不敢不献。趙王送璧時，斎戒五日，今大王亦宜斎戒五日，設九賓於廷，臣乃敢上璧。」秦王度之，終不可彊奪，遂許斎五日，舎相如広成伝。相如度秦王雖斎，決負約不償城，乃使其従者衣褐，懐其璧，従徑道亡，帰璧于趙。C秦王斎五日後、乃設九賓礼於廷、引趙使者藺相如。相如至、謂秦王曰、「秦自繆公以来二十餘君、未嘗有堅明約束者也。臣誠恐見欺於王而負趙、故令人持璧帰、間至趙矣。且秦彊而趙弱、大王遣一介之使至趙、趙立奉璧来。今以秦之彊而先割十五都予趙、趙豈敢留璧而得罪於大王乎。臣知欺大王之罪當誅、臣請就湯鑊、唯大王与群臣孰計議之。」秦王与群臣相視而嘻。左右或欲引相如去、秦王因曰、「今殺相如、終不能得璧也、而絶秦趙之驩、不如因而厚遇之、使帰趙、趙王豈以一璧之故欺秦邪。」卒廷見相如、畢礼而帰之。相如既帰，趙王以為賢大夫使不辱於諸侯，拝相如為上大夫。秦亦不以城予趙，趙亦終不予秦璧。其後秦伐趙，抜石城。明年，復攻趙，殺二万人。⑤秦王使使者告趙王，欲与王為好会於西河外澠池。趙王畏秦，欲毋行。廉頗，藺相如計曰，「王不行，示趙弱且怯也。」趙王遂行，相如従。廉頗送至境，与王訣曰，「王行，度道里会遇之礼畢，還，不過三十日。三十日不還，則請立太子為王。以絶秦望。」王許之，遂与秦王会澠池。秦王飲酒酣，曰，「寡人窃聞趙王好音，請奏瑟。」趙王鼓瑟。秦御史前書曰「某年月日，秦王与趙王会飲，令趙王鼓瑟」。⑥藺相如前曰，「趙王窃聞秦王善為秦声，請奏盆缶秦王，以相娯楽。」秦王怒，不許。於是相如前進缶，因跪請秦王。秦王不肯撃缶。相如曰，「五歩之内，相如請得以頸血濺大王矣。」左右欲刃相如，相如張目叱之，左右皆靡。於是秦王不懌，為一撃缶。相如顧召趙御史書曰「某年月日，秦王為趙王撃缶」。秦之群臣曰，「請以趙十五城為秦王寿」。藺相如亦曰，「請以秦之咸陽為趙王寿。」秦王竟酒，終不能加勝於趙。趙亦盛設兵以待秦，秦不敢動。⑦既罷帰国，以相如功大，拝為上卿，位在廉頗之右。廉頗曰，「我為趙将，有攻城野戦之大功，而藺相如徒以口舌為労，而位居我上，且相如素賤人，吾羞，不忍為之下。」宣言曰，「我見相如，必辱之。」相如聞，不肯与会。相如毎朝時，常称病，不欲与廉頗争列。已而相如出，望見廉頗，相如引車避匿。於是舎人相与諫曰，「臣所以去親戚而事君者，徒慕君之高義也。今君与廉頗同列，廉君宣悪言而君畏匿之，恐懼殊甚，且庸人尚羞之，況於将相乎。臣等不肖，請辞去。」⑧藺相如固止之，曰，「公之視廉将軍孰与秦王。」曰，「不若也。」相如曰，「夫以秦王之威，而相如廷叱之，辱其群臣，相如雖駑，独畏廉将軍哉。顧吾念之，彊秦之所以不敢加兵於趙者，徒以吾両人在也。今両虎共闘，其勢不俱生。吾所以為此者，以先国家之急而後私讎也。」廉頗聞之，肉袒負荊，因賓客至藺相如門謝罪。曰，「鄙賤之人，不知将軍寛之至此也。」卒相与驩，為刎頸之交。D是歳、廉頗東攻斉、破其一軍。居二年、廉頗復伐斉幾、抜之。後三年、廉頗攻魏之防陵、安陽、抜之。後四年、藺相如将而攻斉、至平邑而罷。其明年、趙奢破秦軍閼与下。

第２回の授業の発表範囲は，「廉頗と藺相如」の「(一)完璧帰趙（璧を完うして趙に帰る)」の冒頭部分の９行である①の部分である。発表者は授業者の指示に従って発表用資料を作成し，出席者全員に配布した後，その中の（２）書き下し文・（３）現代語訳・（５）出典と教科書教材との比較の部分を読み上げる形で発表を行った。次いで質疑応答に移り，授業者が出席者に質問を促した。漢文の訓読や内容の解釈，或いは教材と出典との相違点をめぐっていくつかの質問があり，発表者がそれぞれ回答する形で授業は進んだ。第３回以降の授業も概ね同様に進んだが，授業者が毎回非常に悩んだ点は，発表の終了後，出席者からの質問が出るまでに時間がかかる点であった。10分程度で質問が出るならば良い方で，毎回おおよそ20分かそれ以上は質問を待った。その理由は，出席者の予習が少なかったことにあると推測される。授業者としては，受講生の主体的な学びを尊重すべく，最初の質問が出るまではひたすら待った。

本教材について，授業者が大きな問題と考える点は，先に触れた削除の問題である。第２回の授業で扱った①の部分では，教材には『史記』廉頗藺相如列伝の冒頭の箇所（A）が削除されて含まれておらず，また①の部分に続く箇所（B）も削除されている。本教材前には，漢文の部分の前に所謂リード文が付されているが，その内容は，廉頗と藺相如とが活躍した時代，強大国となった秦の昭王が六国に対して軍事的圧力を強めていたとの時代背景の説明のみで，省略された部分の内容にはまったく触れられていない。

第２回の授業の発表者は，削除されている箇所について，そこでは廉頗と藺相如とがどのような人物かを述べているが，記述自体が短く，分かりにくい，二人の性格については教材から十分に読み取れるので省略されたのであろう，と指摘した。

確かに，Aの箇所において述べられている，廉頗は趙の良将で，斉を破った軍功により上卿となった人物であり，武勇をもって諸侯に知られていたこと，また藺相如も趙人で，繆賢の舎人であったことについては，教材文の中にも，①「大将軍廉頗」（大将軍廉頗），⑦「廉頗曰，「我為趙将，有攻城野戦之大功。～」」（廉頗曰く，「我趙の将と為り，攻城野戦の大功有り。～」），或いは①「宦者令繆賢曰，「臣舎人藺相如可使。」（宦者令繆賢曰く，「臣の舎人藺相如使ひすべし。」と。）」と，内容的に重複する記述が存在している。

しかし，『史記』廉頗藺相如列伝はそもそも，最終的に「刎頸の交り」をなすに至る廉頗と藺相如との二人の姿を描くものである。そうであるからこそ，この列伝の冒頭のAの部分において，二人の主人公が直接に関わるまでの経緯の概略が説明されており，また，『史記』の列伝が，廉頗と藺相如とが「刎頸の交わり」を為したところで終わってはおらず，その後に二人が斉や魏を相手に大いに奮戦し，見事に功績を立てたことを述べるDの部分も存在していると理解される。

一方の教材文は，Aの部分が削除されているため，和氏の璧を求める秦の昭王の要請を受けた趙において，困難な任務を負って秦に赴く使者の人選に苦しむ中，繆賢が藺相如を推薦する，というところから話が始まることとなる。加えて，廉頗と藺相如とが「刎頸の交わり」を為した後に功績を立てたことが述べられているDの部分が削除されているため，廉頗と藺相如との二人の伝記としての構成が大きく損なわれ，基本的には藺相如を中心とする話に見受けられるようになっていると思われる。すなわち，藺相如は秦への使者という困難な任務を全うし（①～④），更に?池の会においても大いに活躍した（⑤⑥）。その功績を評価されて藺相如は上卿となり，廉頗よりも上位に序列された。これに不満を抱いた廉頗が，藺相如と会ったならば必ず辱めると言いふらすと，藺相如は廉頗と顔を合わせぬように避けた。このため，藺相如の臣下までもが廉頗を恐れていると思い，暇乞いをする（⑦）。すると藺相如は，秦が趙を攻撃しない理由は，廉頗と自分とがいるからであるが，「今両虎共闘，其勢不俱生。」（今両虎共に闘はば，其の勢俱には生きず）との結果になる。国事を優先するために廉頗を避けたのだと真意を説明し，これを知った廉頗が藺相如に謝罪して，二人は「刎頸の交はり」を為した（⑧），というところで教材は終わる。このため，A及びD部分が削除された本教材のみを学ぶ高校生は，⑦の場面で突如登場するように見える廉頗を，大活躍して出世した藺相如に嫉妬する，ただの狭量な武将と捉えかねないのではないか，と危惧される。

また，Bの部分について，秦への使者の人選に苦しむ趙王に対して藺相如を推薦した繆賢が，その理由を説明するところであるBの部分が削除された結果，教材文では，恵文王は繆賢の推薦をただ受け入れた形に見える。しかし，廉頗が「相如素賤人」（相如は素(もと)賤人なり）（⑦）と述べ，また藺相如が自ら「鄙賤之人」（鄙賤の人）と述べている（⑧）ことからも明らかなように，藺相如はそもそも身分がかなり低い人物であり，和氏の璧を巡る秦との問題が発生した時点では趙の朝廷において無名であり，恵文王が知るよしもなかったと理解するのが自然であろう。Bの部分は，藺相如の人となりを理解する上で重要な箇所であると筆者は考える。

更にCの部分の削除についてであるが，この部分は，既に密かに和氏の璧を趙へ送り出した藺相如と，その言を信じて五日間のものいみを行った秦王とが，再度直接対決する場面である。秦王は，結局趙との決定的な断交を避ける判断をして，藺相如に対して儀礼を尽くし，趙へ帰国させた。教材ではこの部分が削除された結果，秦王をいわばだました藺相如が，なぜ無事に帰国することができたのか，学習者はまったく理解できないと思われる。

以上のように，A～Dの部分の削除により，教材文は『史記』廉頗藺相如列伝とはかなり異なるものとなっていると見なさざるを得ない。注目される点は，教材においては，注なども含めて，削除に関して一切言及されていない点である。授業時間等の問題から，教材の長さを短縮する必要があったとしても，削除された部分の内容が注記，或いはリード分の形で提示されていれば，解釈上の問題が生じることを避けることができよう。

私見では，本教材は，『史記』の列伝を元としつつ，専ら藺相如を主人公とした名場面集，もしくは「完璧」・「刎頸の交わり」などの故事成語の出典の解説へと，改変されたものと理解するのが妥当である。『史記』廉頗藺相如列伝を出典として示しているが，『史記』廉頗藺相如列伝の全体を学習者に示すものではないのである。従って，教材の末尾には，「（『史記』廉頗藺相如列伝より）」とでも示しておく方が妥当と考える。

4．課題

本授業の受講生は，漢文教材が編集によって作り出されたものであることを理解できたであろうと思われる。もとより，教科書は，その編者によって或る意図をもって作成されるものであり，個々の教材についても，或る意図をもって編集されるということは当然であると筆者は考える。教材は原典をそのまま用いるべきだと主張したいわけでは決してない。

しかし，漢文教材を用いて行う授業は，国語科の中では「古典」と位置付けられており，そもそも「古典」とは何か，「古典」教育は何を目指しているのか，といった問題を踏まえつつ，かつそれぞれの教材はその目指す「古典」教育に合致するように編集されるということは，重要なことであると考える。本授業を通して筆者は，少なくとも教材「廉頗と藺相如」は，その教材作成過程において編者が何を意図していたのか，十分には理解することができなかった。学習者に対する十分な配慮を欠き，場合によっては誤った古典理解に陥ることを招きかねない教材であるように思われてならなかった。

もっとも，本授業の目的である「目指すべき漢字・漢文教育のあり方について考察する」ことについては，なにがしかは得るところがあったものの，漢文教育の望まれるあり方については，十分な理解に至らなかったように思われる。この点についてどのように対処するのかが，本授業についての今後の大きな課題である。